

家族の意味

御津南部小・6 木下 七海

私は、五年生の時にじゅくに入った。入ると、とても大変で今までふつうにやっていた家の手伝いをするのが少なくなっていく、手伝うこと自体がめんどくさいと感じるようになった。

夏休みになると、私の家は毎日手伝いをするようになっていく。私は、二階にあるみんなの部屋としん室のそうじ担当になり、気合十分でそうじを開始した。しつかりやるとほこりが無くなり、ぴかぴかになった。私のおかげで家族みんな快適に過ごせると思うと、うれしくなり七月中はとてがんばった。しかし、八月に入ると、めんどくさいと思う気持ちが強くなり、そうじをやるということが多くなった。一日、二日とやらない日が増え、家族みんながそうじをやっている中、私はゲームをしていた。すると、そんな私の姿を見ていたお母さんが少しおこりながら、私に話しかけてきた。

「なんで、そうじをやらないの。」
そう言われた。

「だって、めんどくさいじゃん。」
と、すぐに反論した。お母さんは、あきれた顔をしながら、
「だったら、もうやらなくていい。」

と大きな声で私に一言言って去っていった。このしゅん間、もうめんどくさいそうじをやらなくていいんだと思い、うれしくなった。そして、この時間に何をしようかと考えると、楽しくなった。それ

から私は、家族のみんながそれぞれの担当の仕事をやっている時間には、手伝いをやらずに自分の部屋でゲームをしたりまんがを読んだりして、自分の好きなように時間を使っていた。

お母さんに、やらなくていいと言われてから一週間が経った。私は、いつもゲームをしたりまんがを読んだりしている時間に、ふと家族の姿を見た。お兄ちゃんは、一階のそうじをもくもくとやっていた。お母さんは、洗たくと野菜の水やり、そして私が担当していた二階のそうじをしていた。私は、お兄ちゃんに、

「なんでそうじをやっているの。お兄ちゃんもやらなくていいのに。」
と、問いかけるように言った。すると、お兄ちゃんは、

「めんどくさいけど、家族で住んでいる家だし、やらないとね。」
と、はつきり言った。私は、自分がかかるだけなのにそんなにやりたいんだと思った。そして、お兄ちゃんに背を向けて自分の部屋にもどった。

結局、いつものようにくつろぐ私。でも、今日は少しちがう。私は、お兄ちゃんが言った言葉を思い返していた。私は、お兄ちゃんが言った「家族」という言葉が引かかった。家族ってなんだろう。家族ってどんな存在なんだろう。家族でいる意味って何。そう思ったら、じつとしていられなかった。私は、思いきってお母さんに聞いてみた。するとお母さんは、

「何事も協力したり支え合ったりする存在じゃないかな。」
と言った。私は、この言葉を聞いてどきっとした。私は今、本当の家族になっているのだろうか。協力し合っているのか。支え合っているのか。そのことを考えるときもやもやした。今のままでは、絶対に本当の家族とは言えなかった。だから私は、もやもやした気持ち

を無くすためにずっとやっていなかった二階のそうじを再びやることにした。そして、今日は、みんなが気づかないすみのところも、そうじ機やフローリングシートを使ってしっかりそうじをした。それをやり続けていると、私はあることに気がついた。あれだけいやだったそうじがめんどくさいと思わなくなっていたのだ。そうじをやり続けている私を見て、お母さんは何も言わずににっこり笑顔を向けてくれた。私もお母さんを見て、にっこりした。これが、本当の家族なんだと思った。私は、少しのことでもいいから、本当の家族になるために手伝いをしようと決意した。

そうじをし続けて数日が経った。順調に手伝いができていたが、用事があつてそうじができない日があつた。二日もそうじができないことが心配だったけれど、お母さんが代わりにやってくれていた。それを知った私は、お母さんにありがとうと言いたくなつた。少しはずかしかったけれど、お母さんに、

「ありがとう。」

と言うと、お母さんが、

「大じょうぶだよ。ありがとうと言ってくれてありがとう。」

と、うれしそうに返してくれた。私は、なんでお母さんがありがとうって言うんだろうと不思議に思い、

「なんでお母さんが言うの。」

と聞くと、お母さんは、

「だって、やったことに感謝されてうれしかったからだよ。」

と言った。このとき私は、手伝いもそうだけれど、家族にもしっかりと感謝を伝えることも大切なんだと気づいた。協力と感謝が真の家族だと気づいた。私は、まだまだがんばらないといけない所もあ

るけれど、いつか今以上に真の家族になれるように、家族の一員としてできることをがんばろうと思った。

これからは、お母さんが感動できる私になるから見てね。お母さん、家族のみんな、いつもありがとう。